平成30年10月1日発行（第42号）

碧高ニュース 18

HEKIKOU NEWS

愛知県立碧南高等学校
http://www.hekinan-h.aichi.ed.jp/
〒447-0871 碧南市向陽町4丁目12番地
TEL (0566)41-2564 FAX(0566)42-9609

平成30年度 碧高祭

文化部門 9月5日
体育部門 9月6日

台風のため１日延期された碧高祭が、９月５日・６日に行われました。１日目の文化部門は、全国大会に出場を決めた吹奏楽部の演奏からスタートし、ステージ発表をはじめ、工夫を凝らしたクラス発表や、模擬店、有志による演奏、そして各文化部の発表と、多彩な発表を楽しみました。２日目の体育部門では、競技だけでなく選手への応援も力一杯行う碧高生の姿がありました。また応援合戦では、来賓の方や保護者の方からも大きな拍手が送られていました。閉会式では、成績発表で歓喜や落胆など、それぞれの思いがありましたが、最後の校歌“熱”唱では、全校生徒が肩を組み、清々しい歌声を響かせていました。碧高祭で得た経験や心に残った想いが、大切な財産になることを願っています。

校長コラム 第18回
『夢をかなえるノート』

校長 坪井基紀

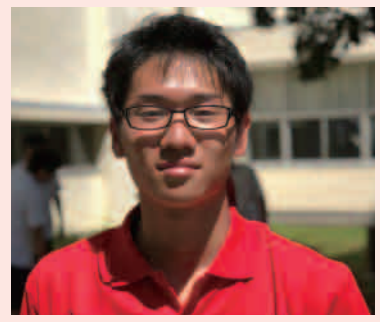
今年は暑い夏でした。今日から10月、残暑もようやく一息つきました。実りの秋です。学習や部活動等は順調でしょうか。もし壁にぶつかってしまったら、どう解決すればいいのでしょう。

私はノートに記録をつけています。ノートは３種類あります。一つ目は一番小さなサイズでズボンのポケットに入ります。大体１年で１冊という割合です。現在No.35になっています。このノートにはやるべきことの項目や短期の目標、気になった言葉を書きます。何か思いついたことがあればすぐにメモをとることができます。二つ目は、少し大きなサイズのノートで、先ほどの小さいサイズのノートに記載した項目の中で、手順を踏んで解決していかなければならないものを取り上げて、その解決の方法や手順を書いています。三つ目は、日々の記録で、その日に何が起こったのかということと、その日に感じたことを120字以内で書いています。この記録を見ると、昨年の同時期にどんなことが起こっていたのかを思い出します。この日々の記録は今年で８年目になります。

このように、自分自身が記録を書いている関係で、他の人のノートの取り方には大変興味があります。サッカーＪ１リーグの中村俊輔選手は、高校生の頃から「サッカーノート」なるものつけているそうです。彼が高校２年生のとき、教員から「試合に勝つために強い気持ちをコントロールする」方法の一つとして薦められたことがきっかけで、自分の目標や課題、反省、決意を書いているそうです。例えば「試合に出られないのは、自分の力がないから。ふてくされている時間、落ち込む時間があるなら、自分に足りないものは何か考えて、練習し、監督にアピールし試合に出て、結果を出す。努力をしろ」。これは試合に出られずにいたときに書かれた言葉です。中村選手は、行き詰まったときほどノートを見返すそうです。辛いときに記したトレーニング法や言葉は、再度迷路に迷い込んだときの出口を教えてくれる地図となっていると語っています。

私も、うまくいっているときにはノートを読み返すことはあまりありません。現状から踏み出せないとき、壁にぶつかり途方に暮れているときに読み返します。脱出へのヒントが得られることもあります。本校では昨年度入学した人たちから、日々の記録等を「手帳」に記載してもらっています。この手帳から夢が生まれ、実現へ向けて力強く進んでくれることを期待しています。

碧高祭を終えて ― 各分団長のことば ―



赤誠分団長 近藤 健太 （碧南市立南中）

碧高祭を終えて僕が感じたことは、みんなで何かを成し遂げる素晴らしさです。僕は初め分団長をするつもりはありませんでした。しかし友人から勧められて分団長になりました。アクシデントもたくさんありましたが、赤誠分団のみんなが支えてくれました。その結果、生徒会執行部賞という特別賞を受賞することができました。碧高祭で、たくさんの友達ができ、たくさん笑って泣き、最高の青春にすることができました。

青陵分団長 沖田 丈昌 （寺 津 中）

僕は中学校時代、不登校でした。当時を振り返ると、辛いことばかりでしたが、高校生になり環境も変わって、高校生活最後の碧高祭では団長を務めさせて頂きました。最初は自分に務まるのか心配でしたが、仲間が力を貸してくれたおかげで、総合優勝を勝ち取ることができました。優勝できたこと以上に、碧高全体が一体になれたことが何よりも嬉しかったです。最高の思い出になりました。僕を変えてくれた碧南高校と、最高の仲間に感謝します。

白虎分団長 古久根 啓太 （碧南市立南中）

僕は、分団長をやってよかったと思ってます。優勝はできませんでしたが、悔いはありません。副分団長、応援団長、副応援団長、そして、皆のおかげでいい分団にすることができました。第42代白虎分団の皆と、高校最後の碧高祭をやれたことは、一生の思い出です。この経験を活かして、受験やこれからの生活を送っていきたいと思います。

玄黄分団長 石川 魁人 （高浜南中）

長い時間をかけて準備してきた碧高祭もあっという間に終わってしまいました。僕たち玄黄は、総合優勝は逃したものの、どこよりも多くのトロフィーがもらえました。玄黄のみんなが全力で戦ったからです。中には、「あの時こうしていれば…」など、色々な気持ちがある人もいると思います。ですが、それも全て最高の思い出になるでしょう。偉そうなことを言いましたが、笑いあり、涙ありの碧高祭をありがとう。碧高生半端ないって！